



九州沖縄農業研究センター ニュース

No.15

平成18年2月



生産者と実需者を結ぶ新しいイベントを開催

● 主な記事 ●

○巻頭言 九州沖縄農業と野菜花き研究の方向

○研究成果の紹介

- ・茎葉が濃い紫色の観賞用カンショ新品種「九育観1号」
- ・蒸切干加工用に適する紫いも新品種「九州137号」
- ・アントシアニン含量が高いサツマイモ新品種「アケムラサキ」
- ・持続性に優れる暖地向きトールフェスク新品種「ウシブエ」

○九州沖縄農研の動き

- ・「はばたけ！明日の九州沖縄ブランド品種たち」九州沖縄農業研究センター開発品種の普及イベント
- ・九州沖縄農業研究センター一般公開レポート
- ・異常気象にどう立ち向かうか、九州沖縄農業の

新技術 ー平成17年度九州沖縄地域農林水産業研究成果発表会ー

- ・次期の5年間、どのように研究を進めるかー若手研究室長との意見交換会を開催ー
- ・「さつまいも伝来300年記念イベント」への出展
- ・革新的農業技術習得研修会 ー環境保全型農業推進における土壌・養分管理技術ー
- ・促成イチゴ生産の飛躍を目指した研究会を開催
- ・「焼酎原料の米・麦の生産に関する研究方向検討会」を開催
- ・九州大学と学術研究交流基本協定を締結

○研究室の紹介

畑作研究部サツマイモ育種研究室

○国際研究情報

第5回アジア太平洋昆虫学会報告

九州沖縄農業と野菜花き研究の方向

野菜花き研究部長 望月龍也

転換点に立つ日本農業

わが国の農業政策が大きな転換点を迎えています。コメやムギ等の主要土地利用型作物の個別品目ごとに、ほぼ全ての生産者を対象としてきたこれまでの施策から、自立した大規模な専門的担い手農家や法人化を指向する集落営農体に施策を集中する品目横断的な政策に転換されます。このような政策に対する、高齢化が進行して足腰の衰えている日本農業に取り返しのつかない打撃を与え、ひいては地域社会の崩壊を招きかねないとの危惧には十分な配慮が必要です。しかし、長年に渡る保護的政策が、結果として日本農業の国際的にも自立した産業として発展する可能性を阻害してきたとの経済界からの指摘は重く受け止める必要があります。地域における全産業中で、最も広大な土地資源を利用してきた土地利用型農業は、今まさに後に引くことができない正念場に立っていると言えます。

野菜花き園芸の現状

一方野菜花き園芸では、これまでも関税等の輸入障壁がほとんどなく、また専門農家率が高い野菜花き園芸では、国内産地間の競争意識をバネにした技術開発等により、近年まで拡大する社会ニーズに応じて高品質な生産物を提供できる高い活力を維持してきました。しかし、急速に進行する高齢化と東アジアを中心とする諸外国における技術水準の向上により、かつてはほぼ100%であった野菜国内消費に占める国内生産シェアは、業務加工用を中心に急速に低下しています。このような状況の打開には、得意な分野あるいは社会・自然・環境等の面で有利な条件を活用できる分野に技術開発を集中し、他の真似ができない付加価値の高い生産物を創り出す必要がありますが、そのようなことはわが国の野菜花き園芸関係者が本来最も得意としてきたところです。

九州沖縄農業における野菜花きの重要性

これからの農業施策が自立的な経営を指向する農業者に集中されようとする中で、品目横断的な政策に関する農業サイドの論議が、当初ややもするとコメやムギ、ダイズ等への支援水準がどの程度維持されるかという点に向きがちであったことは懸念されました。今求められていることは、それぞれの地域

や農業者が、自立できる農業を組み立てる上で必要な作目や技術等を自らの意志と責任で選択することです。そして研究機関の存在意義は、そのための多様な素材をいかに迅速に提示できるかにかかっています。大規模経営のための土地資源に限界のある九州沖縄では、土地利用型作物のみで自立的経営が可能な地域は少なく、これまでも自立的な経営に実績のある野菜花き園芸の役割が一層重要になります。

九州沖縄農研における野菜花き研究の方向

農研機構とりわけ地域研究機関である九州沖縄農業研究センターにおける野菜花き園芸研究が目指すべき方向性について、次期中期計画に向けた論議を踏まえ、野菜花き研究部では以下の3点に大きく整理しました。すなわち、①全国最大の産地が形成されている促成イチゴ生産等、地域に技術的蓄積が大きく、これを一層強化することにより全国的さらには国際的にも優位性を発揮できる分野、②簡易施設等の利用による冬春季の低コスト生産等、地域の恵まれた気象条件を生かした分野（及びこれを安定させるため不可欠の高温や病害虫対策等の生産不安定要因回避技術分野）、③イネ・ムギ・サツマイモ・サトウキビ等の基幹的な土地利用型作物と結合し、これらを補完することにより、全体として地域農業の安定と地域社会の発展に寄与する分野です。

農研機構は次期中期計画において、生産・流通・消費の現場に即した研究課題を掲げ、これを迅速かつ効果的に推進する体制として、研究チーム制を核とする歴史的な組織改革に取り組みます。当センターの野菜花き部門では、所内外の多様な研究勢力や生産現場等との連携をこれまで以上に強化しつつ、専門的な分野としては大規模・周年化を目指したイチゴ生産及び簡易施設等による低コスト安定生産に重点化します。そしてこれを基盤に、地域の多様な土地利用型作物生産との結合にこれまで以上に力を入れていきます。



研究成果

茎葉が濃い紫色の観賞用カンショ新品種 「九育観1号」

サツマイモ「九育観1号」(平成16年品種登録出願)は、サントリーフラワーズ株式会社との共同研究によって生み出された新しいタイプの観賞用品種です。その最大の特徴は、葉身・葉柄・茎ともに非常に濃い紫色を呈することです。観賞用の草花類が春期の販売を中心とする品目が多い中、販売時期が初夏から夏場でありしかも葉色がユニークな濃紫色である「九育観1号」は極めて個性的な園芸植物です。葉形も美しい心臓形であり、花壇や庭先、プランターで手間無く栽培でき、夏の花壇のアクセントに最適



です。さらに、黄色の葉をした既存の観賞用サツマイモ品種と寄せ植えすると、「紫」と「黄」とのコントラストが際立ち、美しさがいっそう引き立ちます。このように、初夏から盛夏期にかけて作りやすく旺盛な生育を示すサツマイモの長所を活かしたガーデニング素材として本品種はうってつけです。ホームセンターや大手園芸店などにおいて、「テラス・ブロンズ」の商品名にて大型連休頃からポット苗の形態で販売されています。

(畑作研究部遺伝資源利用研究室長 高畑康浩)



研究成果

蒸切干加工用に適する紫いも新品種「九州137号」

「九州137号」は現在生産されている紫いも品種の中で最も蒸切干(干しいも)加工適性が優れています。従来の紫いも品種では、蒸切干の色が黒くなり、中白(なかじろ)やひび割れなどの品質劣化が生じて製品化が困難でした。「九州137号」の蒸切干は紫色で見栄えがよく、肉質が柔らかく食味は良好です。当面の普及先である茨城県水戸市では、消費者の健康志向の高まりを背景にして、紫色の蒸切干を製品

化して需要拡大を図るとしています。なお、本品種はいもの外観や蒸しいもの食味が優れており、青果用として利用できることから、九州沖縄地域での普及も期待されます。栽培に当たっては、つるぼけしやすいので過度の施肥は避け、貯蔵性が劣るので収穫時は丁寧にいもを扱い、貯蔵中の低温や乾燥に注意します。

(畑作研究部サツマイモ育種研究室長 吉永 優)



九州137号 (交配組み合わせ: 九系165×種子島紫)



九州137号の蒸切干(左)

研究成果

アントシアニン含量が高いサツマイモ新品种「アケムラサキ」

「アケムラサキ」はアントシアニン色素含量および加工適性が高い「アヤムラサキ」を母、外観が優れるアントシアニン系統の「九系174」を父とする交配から選抜・育成しました。「アケムラサキ」はくびれ等のいもの外観や色素含量のばらつきが問題となっている「アヤムラサキ」、多収でいもの外観は優れるが、色素抽出にはやや不向きな「ムラサキマサリ」の短所を改善しており、色素含量は栽培条件を問わず、従来品種より高いレベルにあります。



アケムラサキの塊根

ペースト・パウダーの色調は「アヤムラサキ」よりやや濃いめの色調ですが、色素利用には差し支えありません。また、いもの形状は長紡錘形ですが、結着位置がやや浅いため「アヤムラサキ」より掘り取りは容易で、しかも収量性は高く、土壌線虫類にも強いので非常に作りやすい品種といえます。本品種は色素・加工用サツマイモとして宮崎県を中心とした普及が期待されています。

(畑作研究部サツマイモ育種研究室 境 哲文)



ペースト色の比較

研究成果

持続性に優れる暖地向きトールフェスク新品种「ウシブエ」

トールフェスクは、多年生の寒地型牧草で、耐暑性、耐湿性、耐干性等各種ストレス耐性に優れることが特徴です。適応地域が広いことも特徴で、北海道から九州まで適応し、九州の低標高地(標高250m以下)がトールフェスク栽培の南限にあたります。一方、九州の中・高標高地においては、パヒアグラス等の暖地型牧草或いはオーチャードグラス等の寒地型牧草より持続性が高く、多収量が期待できるため、永年利用草地の基幹草種として位置づけられています。土地を活用した家畜生産が今ほど重要視されたことはなく、既存の永年草地の生産性向上に加えて、未利用農地或いは転換田等を活用した省力的・高品質飼料生産が求められる状況で、トールフェスクの利用場面は拡がりをみせています。

「ウシブエ」は、現在、利用が最も多い中生を対象とし、九州内の自生集団を主な育種母材として、越夏性と持続性の改良により育成されました。現状の中生品種では暖地における越夏性、持続性が最も優れる品種です。採草、放牧の両方に利用できますが、特に、放牧条件において草量が多く維持され、採食量が多いことが示されました。「ウシブエ」という名前は、放牧に向く品種であることから、稜線

に拡がる草地をゆっくり移動する牛群をイメージして命名されたものです。イメージどおり広大な草地にしっかり根づいて豊かな飼料を生産し、家畜生産を支えることを期待しています。

九州の永年草地面積は全盛期の昭和40年代後半のレベルを維持するものの、飼料自給率の低下と合わせて草地更新率も減少し、トールフェスクの需要も減少傾向で現在に至っています。繰り返しになりますが、家畜生産に安全・安心が強く求められ、土地の潜在能力を引き出す資源循環型へと路線変更しようとしている今こそ、新品种「ウシブエ」の活躍の時と考えています。

(畜産飼料作研究部牧草育種研究室長 我有 満)



左:「ウシブエ」 右:「サザンクロス」(標準)
越夏後の草姿

九州沖縄農研の動き

「はばたけ！明日の九州沖縄ブランド品種たち」 九州沖縄農業研究センター開発品種の普及イベント

師走を迎え急に冷え込み始めた12月7日（水）、熊本市北部の丘陵地帯にある菊南温泉観光ホテルにて、「はばたけ！明日の九州沖縄ブランド品種たち」～九州沖縄農業研究センター開発品種の普及イベント～を開催しました。

イベントは九州沖縄農業研究センターが主催し、九州農政局、九州沖縄農業経済推進機構（九農構）の共催のもと開催し、150名を超える参加者がありました。通常のイベントは一般参加型ですが、本イベントは一般への案内を一切行わず、農業生産法人や、農業団体、加工メーカー、流通業者等の品種が普及するために必要な業界約500カ所へダイレクトメールによる案内にて参加を呼びかけました。500分の150という数字はかなりの高確率ではないかと思われます。

イベントではまず、花元九農構会長、佐々木九州農政局次長に共催機関としてご挨拶をいただき、山川所長が開発品種のプレゼンテーションを行いました。次に会場を移し、パネルやサンプルの展示と開発品種を使った料理の試食で品種のPRを行いました。試食用の料理は、当センターの研究協力員である菊南温泉観光ホテルの大島総料理長に作成していただきました。

今回のイベントを通じて、生産者や加工・流通業者の交流が進み、当センターが開発した新品种の普及はもとより、生産者の安定経営、食品産業の更なる発展、そして、今よりもっと豊かな食卓が実現することを望んでいます。

（企画調整部情報資料課 野中公広）



九州沖縄農研の動き

九州沖縄農業研究センター一般公開レポート

平成17年10月29日（土）に、「温暖化と九州農業～水資源や病害虫発生への影響は？～」をメインテーマに一般公開を開催しました。当日は好天にも恵まれ、1,590名の来場者で賑わいました。今回は初の試みとして、当センター全体の一般公開となる



よう、隔地研究部（水田作、畑作、野菜花き）のコーナーを設けました。

温暖化のテーマに合わせた3つの講演会では、熱心な質問もあり、立ち見が出るほどでした。この他、当センターが開発した小麦チクゴイズミのうどんや、紫サツマイモのジュース、サツマイモの天ぷら、サツマイモの葉で育った豚肉のソーセージ、搾りたての牛乳などの試食コーナーは長蛇の列になるほどの賑わいでした。また、いも掘りコーナーでは、子供たちが泥だらけになりながらも楽しそうにいも掘りをしていました。

今年は、葉を食べるサツマイモ「すいおう」の加工品を多く販売されている水辺プラザかもとより出展いただき、当センターのPRに一役買っていただきました。

（企画調整部情報資料課）

異常気象にどう立ち向かうか、九州沖縄農業の新技术 —平成17年度九州沖縄地域農林水産業研究成果発表会—

本年度の成果発表会は、「異常気象にどう立ち向かうか、九州沖縄農業の新技术」のメインテーマの下、平成17年11月22日に大分市・大分県農業会館を会場に349名の参加を得て開催され、最新の研究成果が発表されました。

1. 「温暖化の現状と予測」では、当センター大場和彦室長が温暖化が農業生産に与える影響を紹介

しました。

2. 「稲作における温暖化対策技術」では、大分県農林水産研究センター吉良知彦主任研究員、当センター坂井真室長がそれぞれ、高温による米の品質低下回避に向けた栽培、育種分野の取り組みを紹介しました。

3. 「園芸作における高温／強風対策」では、大分県農林水産研究センター後藤英世主任研究員、沖縄県農業試験場玉城磨研究員、大分県農林水産研究センター川田重徳主任研究員がそれぞれ、施設栽培における昇温回避技術、低コスト耐風性施設、台風によるナシの落果対策技術を紹介しました。

総合討論では、「異常気象対策とは言え、新たに特別なことに取り組むわけではない。これまでの個々の技術対策をしっかりと行うことが重要」との貴重な提言がありました。

（企画調整部研究調整官 岡本正弘）



九州沖縄農研の動き

次期の5年間、どのように研究を進めるか
—若手研究室長との意見交換会を開催—

12月6日、就任3年目までの室長12人と所長をはじめ幹部等8人が出席し「若手研究室長との意見交換会」を開催しました。この意見交換会は、若手のリーダーが一堂に会し、所の幹部と直接に意見交換することで、情報・目標の共有化を図るとともに、リーダーとしての意識を醸成しようとする目的で昨年開始されたものです。

当センターを含む独立行政法人は、平成13年4月に発足し今年度で第一期の中期計画期間を終了します。現在は、次期5年間の中期計画の検討の最中ということもあり、今回のテーマは「次期の5年間、どのように研究を進めるか」としました。

所長は冒頭の挨拶で、Harvard Business Review誌の記事を引きつつチームにおける個人間、チーム間のコラボレーションの考え方を示しました。

その後、武政企画調整部長の司会により、各室長の自己紹介（「我が分野の特徴と次期における研究の進め方」）、薬師堂チーム長の講演（「私はどのようにチームの研究を進めたか」）、それらを踏まえた意

見交換の順に会を進めました。

最大の関心事をテーマにしたことから、自己紹介も熱がこもって持ち時間を超過する場面もあり、意見交換でも活発な議論が交わされました。主な論点として、①分野ごとの研究の進め方等の特徴と分野間の違い、②その特徴を踏まえた今後の研究のあり方、③異分野との連携のあり方、④分野としての若手育成、⑤次々期を見据えた研究の進め方、等がありました。（企画調整部連絡調整室長 笹倉修司）



「さつまいも伝来300年記念イベント」への出展

1705年に前田利右衛門が琉球からさつまいもを持ち帰り、現在の山川町で栽培を始め、薩摩全域に広がったと伝えられています。それから300年後の2005年11月4日（金）～6日（日）にかごしま県民交流センターにおいて「さつまいも伝来300年記念イベント」が開催されました。

イベントは4日の前夜祭にはじまり、5日～6日はかごしま県民交流センターでシンポジウムや展示、分科会、試食販売など盛り沢山の企画が用意されていました。

当センターからは山川所長がシンポジウム（「可能性」から「具体」へ）と分科会（スウィートポテトからスペースポテトへ）、吉永サツマイモ育種研究室

長が分科会（永遠のさつまいも）のパネリストとして出席しました。

また、室内展示会場ではさつまいもの新品种や機能性について展示するとともに、現在研究中のさつまいも総合利用について紹介しました。当センターのブースをはじめ、会場入り口などにて「すいおう」が展示され、さつまいもの主役である芋よりも目立っていたようです。

イベントには約35,000名の来場者がありました。会場のあちこちに観賞用さつまいものプランターが飾られるなど、さつまいもが鹿児島県民に好まれていることを実感した2日間でした。

（企画調整部情報資料課）



室内展示会場を見学される伊藤鹿児島県知事



シンポジウム「可能性」から「具体」へ
中央が山川所長

九州沖縄農研の動き

革新的農業技術習得研修会 環境保全型農業推進における土壌・養分管理技術

環境と調和のとれた持続型農業推進の視点から、有機性資源の利活用促進と環境保全の両立をはかる総合的な土壌・養分管理技術について、その基礎・応用技術及び堆肥等有機質資材の生物的安全性評価手法を習得することを目的に、平成17年11月14日から16日の3日間、九州沖縄農業研究センター（西合志）で農業普及指導員などを対象に研修会が行われました。講師には、有機質資材の製造技術、品質、生物評価技術および利用技術、土壌・水的环境解析



および管理技術などの分野での第一人者である九州研の2名、機構内の他機関から2名、他独法1名、県2名、大学2名、民間企業1名にお願いしました。研修には明確な参加目的を持った、北は茨城県から南は宮崎県の9県から12名が参加しました。筆者は可能な限り聴講したが、各講師は基礎的から応用的な事まで、できるだけ分かり易く説明されました。そして研修者にはこの研修成果を現場で使おうという姿勢が見て取れました。研修会の最後に参加者との意見交換を行いました。参加者から農業現場で有機物資材活用に伴うご苦労の話が進り出され、また今回の研修成果を各県に持ち帰り、問題解決のために普及する意が語られました。研修全体に対する参加者の評価は、「よそでは経験出来ないような、色々な分野の専門的な講義が聞けて有意義であった。」等、良好であったが、「現場での実習や見学があれば、さらに良かった。」とのコメントが出されました。（環境資源研究部長 山田一郎）

促成イチゴ生産の飛躍を目指した研究会を開催

イチゴはわが国の施設園芸において大変重要な役割を果たしています。その大部分はハウス促成栽培によって生産されていますが、近年は「とちおとめ」「さちのか」「さがほのか」「あまおう」等の新品種や高設栽培等の新技術の普及により、生産流通の現場は大きく姿を変えつつあります。また、炭そ病や萎黄病等の多発対策、労働集約性の高い生産過程の大幅省力化等、技術的課題も少なくありません。

そこで、これらの課題に立ち向かい、近未来におけるイチゴ生産の飛躍を図るため、平成17年11月24～25日に、全国から約180名の関係者がわが国のイチゴ生産の約40%を占める九州に集まり、イチゴの生産流通に関する研究会を開催しました。

研究会では、佐賀県及び福岡県のイチゴ生産現地を視察後、久留米市内に会場を移し、新品種開発、生育制御及び病害虫防除技術、産地から小売までの流通等に関する現状と今後の方向等が報告されました。当センターからは、将来の法人経営を想定した

大規模周年生産に向けた技術開発の方向性を提起しました。これらの話題提供を受けた総合討論では、イチゴ生産の飛躍に向けて、全国の関係者が連携と情報交換を一層深めていくことを確認しました。

（野菜花き研究部長 望月龍也）



佐賀県下の高設栽培ハウスでの現地検討

九州沖縄農研の動き

「焼酎原料米・麦の生産に関する研究方向検討会」を開催

平成17年12月8日（木）、「焼酎原料米・麦の生産に関する研究方向検討会」を水田作研究部で開催しました。酒類総合研究所の研究者、国税局の鑑定官等を講師に招き、焼酎酒造や小売の業者、農業試験研究・普及機関、生産者、九州農政局等、92名もの参加を得ました。

九州沖縄地域は焼酎の原料生産、醸造、消費の基地ですが、麦、米は輸入物が多く、国産で高品質・低価格な原料の供給が求められています。原料生産に関わる研究の意義は高く、関係者で情報交換を行



い、研究方向を考える。というものです。

講演では、①「焼酎のできるまで」として、酒類総合研究所酵素工学研究室の三上重明室長、②焼酎乙類の品質評価法と今後の消費動向として、熊本国税局鑑定官室の神谷昌宏室長に紹介頂きました。現場の精麦業者からは、石橋工業の半田正和品質グループリーダーに、③「精麦及び醸造適性」、醸造業者から三和酒類研究所の岩見明彦研究室チームリーダーに、「麦の醸造適性評価法」の話題提供を頂きました。九州沖縄農業研究センターからは、④「焼酎用米・麦の研究」として、坂井真稲育種研究室長、河田尚之上席研究官が有望な品種・系統について紹介しました。

締めくくりに、「市場評価と原料の実需評価からみた焼酎用麦・米の生産に関する研究方向」としてパネルディスカッションを行い、1) 各焼酎の特徴・売れ筋、消費の方向、2) 嗜好要因、3) 好適原料の特性、4) 原料用米麦の生産方向、等について、論議を深めました。

検討会終了後も「人の嗜好の違い」や「研究連携」に関する話が続いて盛会でした。

(水田作研究部長 堀末 登)

九州大学と学術研究交流基本協定を締結

九州沖縄農業研究センターは、九州大学大学院農学研究院、大学院生物資源環境科学府及び農学部と12月9日、九州大学キャンパスで、「学術研究交流計画に関する基本協定」を結びました。調印式には当センターの山川所長、九州大学の今泉農学研究院長等が出席しました。「基本協定」締結は当センターとしては九州東海大学に次いで2件目、九州大学農学研究院としては初めてのこととなります。

本協定では、相互理解の促進、協同研究の推進、研究者の研究促進および養成等を目的として、研究者（教員・研究員）や学生の派遣・交流、遺伝資源の相互利用および知的財産の創出・活用等を行います。

農学研究の基礎部門と技術開発のトップレベルにある両者が共同研究等を通して、基礎～応用分野で

連携を強化することにより、九州農業の発展に貢献する革新的な農業技術の開発が期待できます。

(企画調整部研究調整官 岡本正弘)



研究室の紹介

畑作研究部サツマイモ育種研究室

サツマイモ育種研究室では、4名の研究員、交配採種や圃場試験の業務科スタッフ6名、パート職員8名が一丸となって九州沖縄を中心とした暖地向き新品種の育成に取り組んでいます。主な研究テーマは、良食味で青果用のほか加工用にも利用できる汎用品種、サツマイモでん粉の高付加価値化をめざした低温糊化性でん粉品種、焼酎の香味特性と栽培特性のバランスが取れた醸造用品種、機械化・省力栽培が可能になる直播用品種、茎葉中のポリフェノール含量や成分を一層改良した茎葉利用品種の育成です。

近年の成果として、サツマイモの用途拡大につながった高アントシアニン品種「アヤマラサキ」、「ムラサキマサリ」や「アケムラサキ」、高でん粉・多収のでん粉用品種「コナホマレ」や「ダイチノユメ」、甘くておいしい青果用の「べにまさり」、オレンジの肉色がきれいな総菜用品種「アヤコマチ」、機能性が高い茎葉利用品種「すいおう」などバラエティーに富んだ品種を育成しました。

これからも引き続き、実需者、県農試、農家、育種・加工分野の研究者との連携を大切にして、実需ニーズに対応した品種育成を加速させ、九州沖縄の地域経済の活性化に貢献したいと考えています。新品種の試験的栽培、共同研究の提案や技術講習など外部からの問い合わせや受け入れに積極的に対応しますので、どうぞお気軽にお問い合わせください。

(畑作研究部サツマイモ育種研究室長 吉永 優)



サツマイモ育種研究室での実生個体選抜試験の様子

国際研究情報

第5回アジア太平洋昆虫学会報告

私は2005年10月18～21日に韓国の済州島で開催された第5回アジア太平洋昆虫学会で「イチモンジカメムシはホソヘリカメムシ集合フェロモン成分をカイロモン（餌を探す手掛かり）として利用している？」というタイトルでポスター発表を行ってきました。大会直前にプログラムをチェックした際、ほとんど同じタイトルの発表があることを知り、驚くとともにいろいろと考え青くなりました。学会当日、案の定、韓国のグループが私たちと同じ現象について研究を進め、同じ結果・結論に至っていることが分かりました。直接話しあったところ、向こうもまだ論文という形にはしてないということを知り、ちょっと安心しました。しかし、相手も論文としてまとめたいとのことでしたので、私の方でも現在、発表内容の論文化を急いでいます。早く論文がアクセプトされ、あの時はあんなこともあったよな～、などと思い出話ができる日を待ちわびている今日こ

頃です。末筆になりますが、学会期間中、海外の研究者と直接議論を深め、また自分の研究についてのコメントを頂けたことは非常に有意義でした。

(地域基盤研究部害虫生態制御研究室 遠藤信幸)

